

仕事人秘録

欧州の国際インダストリアルデザイン団体協議会エクスレント特別賞など最高峰の受賞を重ねてきた工業デザイナーの川崎和男氏。これまで450点の工業製品をデザイン・商品化。グッドデザイン(Gマーク)賞を受けた製品も100点を超す。「デザイン参謀」として多くの企業の成長を導いてきた。

2008年秋のある朝、共同通信社のニューヨーク支局から電話がかかってきた。「川崎さんの話題で持ち盛りだ」と言う。共和党副大統領候補ペイリン氏のトレードマークが私のデザインしたメガネだったの

未来の予感を形に

①

工業デザイナー

川崎 和男氏



かわさき・かずお 1972年(昭47年)金沢美術工芸大学卒業、東芝入社。79年デザイナーとして独立。96年名古屋大学立大学教授。02年大阪大学特任教授を兼務。06年大阪大学大学院教授就任。医学博士。毎日デザイン賞、国井喜太郎産業工芸賞など国内外での受賞多数。福井市出身。61歳。

「激烈な体験」製品に映す

だ。

別に驚かなかった。パウエル元国務長官は15年くらい前から愛用してくれていた。女優のウーピー・ゴードルバークさんのように、メガネをおしゃれのポイントにしている人が使っていていた。

ームは福井県の地場産業だ。1980年代以降は安い中国製にやられていた。「デザイン料を払えないかもしれないけど」という断り付きで、増永社長から相談を受けた。故郷の地場産業を元気にしたい。私もメガネをかけている。デザイナーの最大の楽しみは自分か最も欲しいものをつくれることだ。

私は東芝でデザイナー人生を始めた。あの事故がなかったら独立しなかったかもしれない。生まれ故郷に帰ることもなかっただろう。歩けないと知らされたとき、意外なほど冷静だった。だがリハビリで苦難を味わってからは打ち砕かれた。その後は自分のための

仕事は自分自身の「体感」に根ざす部分が大さい。体感とは体を突き動かされる経験。未来を予感する「におい」をかき取り、形にしなければならぬ。デザイナーにとって、とても大切なことだ。私は何度か激烈な体感を得てきた。私がデザインしたモノを通じてこれまでの道のりを語ってみたいと思う。

川崎氏は車いすをデザインし、盲目の人や目が不自由な人でも使えるタイマーも考えた。40歳代になってから心臓発作で度々入院し、いつ死んでもおかしくないと思うようになった。「人工心臓」をデザインする過程で医学博士号を取得し、大阪大学大学院教授として大学院生にデザインと先端技術の統合を講じる身になった。

車いすをデザインし、盲目の人や目が不自由な人でも使えるタイマーも考えた。40歳代になってから心臓発作で度々入院し、いつ死んでもおかしくないと思うようになった。「人工心臓」をデザインする過程で医学博士号を取得し、大阪大学大学院教授として大学院生にデザインと先端技術の統合を講じる身になった。